

〔研究大会報告〕

第16回（2007年度）JAMS 研究大会報告 その3  
—第2セッション午前の報告・質疑応答内容について—

鈴木 陽一

日本マレーシア研究会第16回研究大会、二日目午前は四人の方から研究報告があった。最初の報告は、伊賀司(神戸大学大学院)からオールターナティブ・メディアの展開とその影響力についての報告であった。報告では、マレーシアにおいて主に野党や政府に批判的な集団により運営されているオールターナティブ・メディアの展開について紹介するとともに、その政治的・社会的影響力について考察することが企図された。

まず、報告者の問題意識が述べられた後、オールターナティブ・メディアの定義がなされた。オールターナティブ・メディアとは「体制側のヘゲモニーに挑戦するために政策、優先順位や観点などで代替的なビジョンを掲げてアジェンダを設定し、国民的なコンセンサスを構築しようとするメディア」である。また、現在のマレーシアにおいてはメディアに対し政権側から直接統制、間接統制があることが指摘された。直接統制としては出版・印刷法、煽動法、国内治安法、公務機密法などがあり、間接統制としては UMNO、MCA あるいは政権に近い者によるメディアグループの資本所有がある。メディアの資本所有の実態については既存研究においては不明なところも多かったが、インタビュー調査などを通して得た知見に基づく概略が示された。

次に、オールターナティブ・メディアの展開について、その勃興の時期からアブドゥラ政権成立の時期まで三期に分けて説明された。第一期は1980年代から1990年代半ばまでで、この時期は主流メディアへの政府統制の完成とオールターナティブ・メディアの勃興の時期にあたる。『ハラカ』『アラン・マンズリー』などのメディアが登場した。第二期は1990年代半ばから1999年までで、インターネット登場とともに政治改革運動も高まった時期にあたる。政府が国策としてマルチメディア・スーパー・コリドー(MSC)計画を推進してインターネット上の非検閲を表明するなか、リフォルマシ運動に伴ってネットの上で政府批判を加えるメディアが登場した。第三期は1999年から2003年までで、メディアへの政府による統制が再編された時期である。この時期、オールターナティブ・メディアは政府からの圧力だけではなく市場からの圧力にもさらされるなど逆境に置かれた。また、『アラン・マンズリー』『ハラカ』『マレーシアキニ』個人ブログ、それぞれどのような展開をとげてきたのか事例の説明がなされた。

最後に、オールターナティブ・メディアは本当に影響力があるのか、警察改革の事例をとりあげながら考察がなされた。これは、主流メディアも改革をアジェンダとしてとりあげようになった事例であった。オールターナティブ・メディアの一般民衆への直接的な影響力は未だに限定されてはいるものの、アジェンダの設定機能や主流メディアへの牽制機能に評価が与えられるべきであり、オールターナティブ・メディアの政治的・社会的な

影響力は無視することができない、との結論であった。

以上の報告に対しては、コメンテーターである田村慶子会員(北九州市立大学)から、オールターナティブ・メディアは既存紙にどのような影響を与えたのか、また衛生テレビなどテレビの普及はどのような変化をもたらしたのか、との質問が出され、応答がなされた。そのほかフローアーからは、オールターナティブ・メディアのアジェンダ設定機能について、また主要メディアの資本所有についてその状況へ質問が出されるなど、報告に対する活発な質疑応答がなされた。

次に綱島(三宅)郁子会員から発表があった。題名は「マレーシアにおけるマレー語聖書の翻訳小史—国語政策およびインドネシア語との比較を中心に—」で、発表は 1. 発表の目的(問題意識と背景) 2. マレー語と聖書の事例問題 3. 国語政策と関連した現代マレーシアのマレー語聖書小史 4. マレー語使用教会の位置づけ 5. マレー語聖書の現在と将来、の構成で順に進められた。

研究の問題意識は「マレーシアの国語であるマレー語で書かれた聖書やキリスト教文献が、マレー当局からもキリスト教共同体内でも、なぜ‘センシティブ’扱いされていたのか。21世紀に入った現在でも、同根の問題が間歇的に循環表出する原因は何なのか。」ということにある。このような問題が起こる背景には、①マレーシアも含めた広範な地域のムスリム世界とキリスト教とは対立競合しつつも同時に共通性も含むこと、②そうしたなか、移民系と先住民族系を構成要素とするマレーシアのキリスト教共同体とマレー文化とイスラームを基軸とする国民文化議論やムラユ概念とのあいだでは、包摂と排除、循環論法などの駆け引きが継続していること、といったことが挙げられる。研究するにあたっては、③キリスト教宣教によっていわゆる‘近代化’の恩恵を受けたという意識がキリスト教の‘土着化’すなわちマレーシア化を阻害していること、④キリスト教共同体内部の多様性と重層性が、言語的・民族習俗的・地域的(都市部と奥地、半島部とサバ・サラワク州)・教派的な違いにも表れ、共同体は必ずしも一つに統合していないこと、⑤国語であるマレー語と連邦宗教のイスラームに関する公開討議や批判のタブー視と同時に、マレー語使用教会が社会経済的に低い地位に置かれていること、⑥マレーシアのキリスト教共同体がインドネシア、シンガポールなどマレー語圏域におけるキリスト教共同体と連繫しつつも独自性を保持していること、などに留意した。

この複層的で未解決の問題が絡み合った状況の中で、マレー語と聖書にまつわる諸問題が発生してきた。1987年9月のサバ神学校でのマレー語使用問題、1992年に中国語聖書40部を警察局が没収した事件、2005年4月の首相府大臣によるマレー語聖書禁止発言と首相による釈明声明、2005年12月22日付内務省からの通告などである。

すぐれたインドネシア語聖書も存在するが、インドネシア語とマレー語とは言語的にも違いがあり、神学語彙の差異も大きいので、マレー語聖書は必要だとされてきた。1972年までは、シェラベア訳のマレー語聖書(イスラーム用語が使われているマレー人向け聖書)が用いられていたが、その頃、中国系インドネシア人のメソヂスト牧師故 Rev. Elkanah T. Suwito が半島部に移住して、一人で聖書を翻訳した。1974年の『マレー語新約聖書:現代人のための福音』が1976年に改訂されて発行。1981年には旧約聖書が完成。1987年には、『マレー語聖書:現代人のための福音』旧新約全巻が出版された。さらに、

その間の言語変化によって再改訂の必要性が出てきたので、1990年5月から改訂版マレー語聖書翻訳作業が開始され、1996年末には旧新約のマレー語聖書が25,000部出版された。翻訳チームは超教派で、マレー人を除くインド系、華人、ババニョニャ、カダザン人である。サバ・サラワク州のマレー語方言の影響、ブルネイ・マレー語とサバ・マレー語の類似性や、インドネシア語にはない宮廷用語を採用したなどの特徴がある。

さらに、二つの調査と著述を元に、マレー語使用教会の社会言語的位置づけについて具体的な言及がなされた。言語別教会数を見ると、マレー語使用教会の数はタミル語使用教会の数以下であった。つまり、マレー語は種族間共通語であるにもかかわらず、信徒レベルで教会内での使用が非常に限られている。1874年にパンコール協約によってマレー人伝道は不可となったこともあり、植民地時代にも、一部の聖書翻訳の試みを除き、マラヤでは十戒と祈祷などがマレー語に翻訳されたのみである。先住民族はマレー語によるキリスト教伝道を受容する場合があるが、マレー人でキリスト教を信じる人は、いたとしてもごく僅かである。1959年にマレーシア教会協議会が教会統合のためマレー語使用を呼びかけたが、1970年代から1990年まで、半島部でマレー語使用教会はほとんどなかった。全教派のうち、25集会が部分的ないしは全体的にマレー語を使うのみである。

マレー語聖書の現在と将来について総括すると、聖書翻訳は時代と共に何度も改訂され、読み継がれていくものであるため、マレー当局による度重なる干渉と抑圧にも関わらず、今後も翻訳改訂作業は継続するであろう。また、キリスト教共同体内での聖書使用や教会礼拝を通じて、マレー語はさらに発展し続けていくべきである。

以上の報告に対しては、アブドゥラ政権になって政府の対応に変化はあったのか、インドネシアなど近隣国からの影響はどの程度あるのか、との質問が出され、応答がなされた。そのほかフローアーからは、1990年代に出された聖書はどの層の人々が買ったのか、教会におけるマレー語使用の実態はどのようなものであるのか、といった質問が出され、報告に対する活発な質疑応答がなされた。